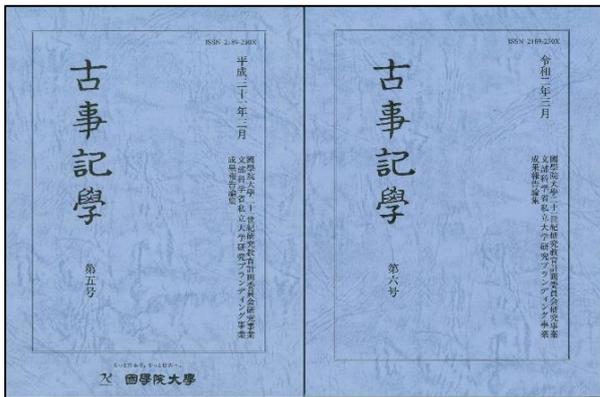
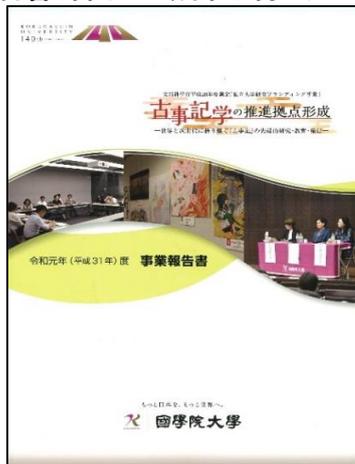


私立大学研究ブランディング事業 成果報告書

学校法人番号	131018	学校法人名	國學院大學		
大学名	國學院大學				
事業名	「古事記学」の推進拠点形成—世界と次世代に語り継ぐ「古事記」の先端的研究・教育・発信—				
申請タイプ	タイプB	支援期間	5年	収容定員	8840人
参画組織	全学(文学部・経済学部・法学部・神道文化学部・人間開発学部・研究開発推進機構・教育開発推進機構)				
事業概要	<p>近世国学を継承する本学創立以来の研究蓄積を基盤に、日本文化の根幹である「古事記」の先端的な研究を推進する本「古事記学」は、21世紀の「古事記伝」編纂を目指す。即ち「古事記」を人類共通の遺産として位置づけ、日本文化の独自性と普遍性を示すとともに、伝統文化継承の担い手を育成することを目的とする。以て本学が世界と次世代に「古事記」を語り継ぐ独自の拠点となることで、日本文化の新たな創造と発展に寄与する。</p>				
事業目的	<p>本事業では、國學院大學(以下、本学)において創立以来130年以上にわたり継承されてきた学知に基づく学際的・国際的観点から「古事記」を再定位し、本学独自の「古事記学」の見地による、21世紀の「古事記伝」となる注釈書を編纂して、その研究成果を国内外に発信し、なおかつ教育へと還元するシステムを構築する。そして「古事記」に立脚し日本文化の新たな創造と発展に寄与する世界的な研究拠点となることを目的とする。</p> <p>【現状課題とテーマ設定】</p> <p>近年、海外から日本への関心が「モノ」から「文化」へと移りつつある。それに対し政府は「クール・ジャパン」や「日本遺産(Japan Heritage)」の認定など、日本の文化産業の世界進出促進や国外への発信などを政策として推進している。更に平成32年の東京オリンピック開催を前に、一層の日本文化の発信・交流の必要が生じており、そのためには根幹となる古典に関する広汎な知識と教養が求められている。</p> <p>特に学術的な動向では、2000年代から非英語圏でも相次いで「古事記」の翻訳が刊行され、本年にはコレージュ・ド・フランスにおいても「古事記」を取り上げるシンポジウムが開催されるなど、国際的な比較神話の観点から「古事記」に世界的な注目が集まりつつある。しかし、その一方で日本の現代社会は、都市化・少子化といった社会構造の変化により、次世代への文化継承が危惧されている。同時に、日本文化に対する理解も一面化・断片化しつつあり、「古事記」理解も同様の状況にある。いまこそ、「古事記」に対する認知・理解を高め、継承者を育成しつつ海外に発信する環境を整備する必要がある。</p> <p>そもそも「古事記」は、稗田阿礼が語り、太安万侶が編纂して以来、日本の精神文化の根幹を伝える書として受け継がれてきた。本学は、「古事記学」を広く国内外へ発信し、教育に活用することを通して、我が国の誇るべき遺産である「古事記」を、過去から未来へと生き続ける「真の古典」として次世代に引き継ぐとともに、そのなかで得られた学びと思索を日本文化の新たな創造と発展に繋げ、世界に貢献できる人材の育成に取り組む。この試みは「古事記」に示された「修理固成」の精神の現代的実践であるともいえよう。</p> <p>【テーマ設定の理由】</p> <p>明治15年設立の皇典講究所を母体とする本学は、近世国学を淵源とする総合的文化研究により、神道と日本文化に関する学知を蓄積・発信してきた。平成14年には21世紀COEプログラム、19年にはオープン・リサーチ・センター整備事業に採択され、「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点」として認知されている。さらに25年度より全学的事業として「古事記」の学際的・国際的研究に着手し、「古事記」の独自性と普遍性を明確化することで、世界のなかに「古事記」を位置づけ、その基底にある人類文化の共通性・多様性の把握を目指す先鋭化した研究を「古事記学」と題して推進している。</p> <p>本学の教育理念である〈神道精神〉とは、「日本人の主体性を保持した寛容性と謙虚さ」である。これは本居宣長の「古事記伝」に象徴される〈国学〉によって明らかにされてきた。〈国学〉の名を冠する本学にとって「古事記学」の推進は、21世紀の「古事記伝」の編纂を意味し、同時に建学の精神を明確化することに繋がる。本事業の推進により、「古事記」の精深な研究・教育・発信がなされ、本学は世界的な日本文化研究の拠点として、さらに周知されていくことになる。</p>				

私立大学研究ブランディング事業 成果報告書

学校法人番号	131018	学校法人名	國學院大學
大学名	國學院大學		
事業名	「古事記学」の推進拠点形成—世界と次世代に語り継ぐ「古事記」の先端的研究・教育・発信—		
事業成果	<p>本事業は、学長のリーダーシップの下、國學院大學(以下、本学)を構成する全組織の参画により進められた、全学的研究事業である。本事業の目的は、「古事記」に関する先端的研究を推進し、その成果を教育へと還元するのみならず、広く社会へと発信することにより、本学を「古事記」に関する世界的研究拠点とすることにある。この研究事業による成果の公開については成果論集『古事記学』(現在第6号まで刊行されている)を中心に、他にも本学博物館での展示やHP等によって公開・発信を行った。また、本事業の推進にあたっては、外部団体である神社本庁総合研究所、公益財団法人日本文化興隆財団、明治神宮神道国際研究所、並びに有識者2名による外部評価委員会を設置し、自己点検・外部評価を基にしたPDCAサイクルによる改善に務めた。</p> <p>以上の研究事業の推進により事業支援期間中に著作1件、成果論集『古事記学』4冊(註釈、論考11本、シンポジウム報告15本、翻刻、翻訳)、事業報告書3冊などの成果が得られた。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>〈古事記学〉</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>〈事業報告書〉</p> </div> </div> <p>①『古事記』の先端的研究</p> <p>本学がこれまで継承・発展させてきた神道学・文学・歴史学・考古学等による実証的な古典研究の成果に加え、現在の研究成果を反映した研究を進めるため、分野を横断した研究会を毎年7回程度開催した。これら横断的研究を踏まえ、本文校訂・訓読・現代語訳・註釈・補註解説を作成した。</p> <p>具体的には、『古事記』上巻「(1)天地初発」から「(32)八千矛神④」までを作成し、公開している。この内、「(1)天地初発」から「(6)神生み」までが、「英訳『古事記』Studies on the Kojiki」として英訳することができた。これらの成果は『古事記学』に掲載され、かつHP上で公開し、古事記ビューアーやPDFファイルとして広く社会に発信している。</p> <p>他に『古事記学』には、毎号『古事記』に関する分野を横断した各種論考を公表するとともに、研究資料として敷田年治『古事記標註』の翻刻・研究も掲載した。</p> <p>②『古事記』データベース・ライブラリーの作成</p> <p>『古事記』に関する研究者に対する有益なツールとして『古事記』の総合的データベース・ライブラリーを構築した。現在、以下のデータベース・ライブラリーが順次、公開・増補されている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・近代古事記研究文献目録(1734件) ※近代(明治初年から昭和20年まで)を対象に研究文献を収集し、検索ができるようにしたもの。 ・神名(192件) ※『古事記』に登場する神々の要点をまとめたもの。 ・氏族(40件) ※『古事記』に収録された氏族に関連する最新の研究成果をまとめたもの。 		

- ・地名(58件)
※『古事記』に登場する地名の要点をまとめたもの。
- ・宮都(62件)
※『古事記』に登場する宮都・仮宮の要点をまとめたもの。
- ・陵墓(51件)
※『古事記』に登場する陵墓の要点をまとめたもの。
- ・神社(95件)
※『古事記』に登場する、もしくはゆかりのある神社の要点をまとめたもの。
- ・『古事記』関連画像データベース(4件)
※國學院大學古事記学センター所蔵の貴重資料の画像、および、その書誌情報を一般に公開しているもの。

③教育に資する『古事記』テキストの作成と実践方法の研究

教育に資する『古事記』テキストの作成を目的として、国際研究フォーラム「日本の宗教はどう教えられているか—How Do We Teach About Japanese Religions?」を本学日本文化研究所との共催によって開催し、初學者向けの入門書として谷口雅博『古事記の謎をひもとく』(弘文堂、平成30年)を刊行した。

また、初等教育向け『こども古事記』作成のため、古事記学研究会「古事記神話の幼年向け再話作品について—イナバノシロウサギ神話・ヤマタノヲロチ退治神話の場合—」(平成30年)や令和元年度の国際シンポジウムを教育をテーマとするものとして開催した。これらの成果を踏まえた『こども古事記』を作成しており、令和2年度中にHPで公開する予定である。

〈2、研究交流の活性化〉

研究交流の活性化を目的として毎年、国際シンポジウムを開催した。テーマは研究事業に関わるものから選定し、平成30年度は中間総括を兼ねたシンポジウムとした。事業支援期間中に開催された各回のテーマは次の通りである。

- 「神話の詩学—舞・歌・型—」(平成28年)
- 「時空を超える〈言葉〉—神話の翻訳をめぐる—」(平成29年)
- 「古事記と『国家』の形成—古代史と考古学の視点から—」(平成30年)
- 「神話・伝承の教材化と実践—『子ども古事記』がひらく世界—」(令和元年)

国際シンポジウムでは、国内外を問わず研究者を招き、活発な議論を展開した。特に、中間総括シンポジウムでは、学外の宮崎県立西都原考古博物館を会場とし、宮崎県共催、西都市・宮崎県神社庁後援の下で開催した。

他にも、セインズベリー日本藝術研究所との連携による学術講演やハーバード大学ライシャワー研究所並びに本学研究開発推進機構日本文化研究所との共催によるワークショップ、南開大学外国語学院との共催による国際研究フォーラム、皇學館大学との連携による研究会等を以下の通り開催し、国内外の研究機関との学術交流を推進した。

- ・セインズベリー日本藝術研究所(イギリス、ロンドン・リッチ)
「Carmen Blacker Lecture Seriesにおける学術講演」(平成29年)
- ・ハーバード大学ライシャワー日本研究所(アメリカ、ボストン)
「Myth and Ritual in Ancient Japan(古代日本の神話と儀礼)」(平成30年)
「近現代日本の宗教文化と『古代』」(令和元年)
- ・南開大学外国語学院(中国、天津)
「南開大学外国語学院東アジア文化研究センター学術講演会」(平成30年)
「第1回国際協働シンポジウム」(令和元年)
- ・皇學館大学(三重県)
「皇學館大学連携古事記学研究会」(東京、平成29年)

さらに、国際学会The European Association for Japanese Studies(EAJS、ヨーロッパ日本学会、リスボン、平成29年)において「Shinto Culture in the Age of Globalization: Challenges to Conveying Concepts」と題する発表を行い、本学で進める『古事記』研究を世界的に発信した。

〈3、ブランディング・広報活動の取り組み〉

本学は、「國學院ブランドの確立と強化」を目標として掲げる「21世紀研究教育計画(第4次)」を策定している。この目標に向かい本学では、全学的なブランディング・広報活動に取り組んでいる。

その内、本事業では、ブランディング活動として研究成果を広く発信するため、『古事記学』の刊行や各種シンポジウム・ワークショップを開催するとともに、学内に対しては共通教育「國學院の学び(古事記を諸分野から読む)」を開講し、学生に広く『古事記』に関する学知を教授し、本事業の成果でもある『古事記の謎をひもとく』を教科書として用いた。

また高校生・大学生等を対象とし、「古事記」の理解と日本文化への興味・関心を喚起することを目的とする「古事記アートコンテスト」を一般財団法人神道文化会との共催により、計3回開催した。このアートコンテストには、全国から総計848点(第1回117点、第2回337点、第3回394点)もの作品が応募された。受賞作品は本学博物館において展示するとともに、本学の卒業生によって組織される院友会や各地の神社の協力を受け、全国で巡回展示(延べ16カ所)を行うことにより本学の取り組みの周知に努めた。



〈古事記アートコンテスト表彰式〉



〈古事記アートコンテスト展示〉

広報活動については、HP・SNSを基点に発信を行った。HPについては、世界の国々の3分の1にあたる約60カ国からアクセスがあった。また本学の広報紙「國學院大學学報」や神社界の機関紙「神社新報」等を通じて社会への情報発信を行った。さらに神社検定を主催し、本研究事業の外部評価委員でもある日本文化興隆財団と連携し、国際シンポジウムやイベントについての情報を発信した。他にも株式会社デジタルアドバンテージが提供するスマートフォン向け地図アプリ「ロケスマ」と連携し、古事記関連のアプリとして「古事記学マップ」を作成し、令和2年度中に公開する予定である。

以上のような取り組みによって本学の活動について広く社会へ周知するよう努めた。

今後の事業成果の活用・展開

〈1、研究事業の継続〉

本研究事業に対する支援期間は、令和元年度までであるが、本学の計画は5年間を目標として立案されており、令和2年度については、本学の特定推進研究の一つとして位置づけ、予算配分を行い、研究事業を継続することを決定している。

それにより継続される研究事業が、以下の2点である。

- (1) 「古事記」の本文校訂・訓読・現代語訳・註釈・補註解説・英訳作成の継続。
- (2) 「古事記」データベース・ライブラリーの構築を継続し、データベースを完成させることにより本学を主体とする研究インフラの整備。

これら研究事業の継続によって21世紀の「古事記伝」の完成を期す。また、引き続き研究成果については、書籍・論集等の刊行やHP・SNSを通して、社会へ発信する。さらに、研究成果の英訳については、本学日本文化研究所が継続して作成し、発信を行っていく。また、令和2年度には、これまでの研究を総括する国際シンポジウムを開催する予定である。

さらに、作成された「こども古事記」を教育実践に関する授業で活用するとともに、本学人間開発学部で開催されている学生が地域の幼稚園、小学校、児童館等に出向き実際に子どもたちに絵本を読み聞かせる「絵本キャラバン」等において用いることで、質を向上させていく。これによってアップデートされた「こども古事記」を作成・刊行し、広く社会へ研究成果を還元することとする。

〈2、後継事業の策定〉

上記、継続される研究事業を柱としつつ、その研究成果・蓄積を活用することを目的とする後継事業を策定する。この後継事業においては、「古事記」のみに止まらず、「日本書紀」や「万葉集」、「延喜式祝詞」等を含む、本学独自の視点に立脚した「古典」に関する総合的な研究事業として企画・立案を行う。また、後継事業の研究成果については学内はもとより、広く社会に還元することで、「古典」をめぐる様々な現象への知識・関心を喚起し、「古典」の魅力をも文化資源化することによって、社会の発展に貢献していく。

以上により「古典」研究の拠点たる本学の役割・意義を確固たるものとし、その使命を果たす。